膳眞規子女史著

「自然物おもちやの序」

倉橋惣三

私は、幼時、原野の遊びを餘り多くを知らない方であつたけれども、それでも、今思ひ出す樂しい追憶の中には、草の葉、木の實、小石、貝殼といつた風のものが、玩具屋で買つて貰つた玩具に劣らない位、大切な僕の寶物であつたことを忘れない。殊に、その頃私の家に居たばあやが、そうした自然物で出來たいろ〳〵の遊び方を知つて居て、私の小さい目を次から次へ、驚異と滿足とに輝かせて呉れた。それは、母が布の小切や千代紙で始終作つて呉れた小藝術玩具に對して、今でいへば立派な自然物おもちやであつたのである。たゞ、そのばあやは作つて呉れるだけで、私に作らせようとはしなかつた。自分で試みようとしなかつた私も創作性の足りない子であつたに相違ないが、ばあや先生も幼兒教育の原理を知らなかつたらしい。

時は移り、舞臺は廻る。その創作性の乏しかつた子が幼兒教育の理屈をいふようになつて、「フレーベルの恩物が恩物なら、天の與ふる自然物こそ大恩物だ」といふようのことを若氣に任せて言ひ立てたのを、靜かな意味で聽いて下さつた人の一人が膳女史であつた。聽いて下さつたといふよりは、既に同じことを考へ、同じことを實現してゐたらしかつたから、人一倍共鳴して下さつたに他

ならない。

膳女史に招かれて、大阪市江戸堀幼稚園を始めてお訪ねしたのがその頃であつた。そこには女史の考案になる自然物玩具が、口で論じ、手では一つも作つたことのなかつた私を、心の底から喜ばせた。その時が既に今から二十年近くも以前にならうか。膳女史の自然物おもちやの研究も永いことゝいはなければならぬ。爾來、女史は江戸堀幼稚園長としても、又御引退の後も益々多く作られ、私は益々説き、私の口と女史の手とが、松の葉や小貝を、並べて見たり、曲げて見たりして、今日に到つてゐるのである。そして、何千の保姆さんや、何萬の幼兒達に、同じことを、試みて貰ふように、機會ある毎に勸めて來てゐるのである。

幼兒教育に於ける自然物おもちやの價値は、私の口に言はせれば、多くの箇條分けと、相當深さももつ理論をいふ。しかし、口では、一枚の木の葉をどうすることも出來ない。それが一度び女史の手に渡れば、出來る〳〵、立處に幾十種のおもちやになる。材料は路傍の落葉、磯の小貝、ほんとうに一文の値うちもないものから、幼兒玩具として、趣味玩具として、千金もかへられぬ教育性と藝術性が作り出される。名手とは眞に斯ういふ手をいふのであらう。その名手中の名手、膳女史の作を、何んとかして長く存し、廣く示したいものだといふことは年齡に於て、幼稚園の志に於てお母さんと息子とのような私が女史の爲に久しく考へて居たことであつた。しかも、子は、どうも不精に追はれて實行がおくれ〳〵になるばかりなので、とう〳〵老女史を煩はして、御自身筆を採つて大要を書いて頂いたのが此の小冊子である。ところが、書いて頂いてからもまた出版の運びが遲れた。その申譯ない私の怠りを見兼ねて、手を

貸して呉れたのが、お茶の幼稚園の及川保姆と菊池保姆とである。及川さんには其の得意の筆を以て此通り澤山の美しい寫生を描いて貰つた。菊池さんには原文に對する遠慮勝ちな氣持を促したて丶、一般の讀者諸君に實際上便利のように編纂して貰つた。そして、それまではといはる丶女史に願つて、現在悠々たる朝夕を樂しんでゐられる鎌倉のお庭で近影まで撮つて頂いて、すなはち、小さいながら此の愛すべき冊子が出來上つたのである

さて、此上は、讀者諸君に是非御自身試みて頂きたいことであるが、勿論、自然物は無限である諸君の創作が此の冊子にあるもの――それすら女史の工夫の極く一部分――以外、無限であらうことも勿論である。そして、その種類の無限と共に自然物おもちやの味の無限も、實際の上で味つて頂きたい。但し、私の昔のばあやと違つて、それを、幼兒達に作らせて頂かなければならぬことも申上ぐるまでもない。

――（昭和六年七月）――

尙、此小冊子の準備中・神戸幼稚園の望月くに子氏のわれ等と同じ心から膳眞規子著「自然物應用による思物」といふ美本が出版せられた。今度の小冊子が、專ら實際保育上の便利を主に、極めて簡素に出來てゐるのと違つて、その數十面の藝術的な寫眞圖は、膳女史の作品をまのあたり見るように浮き出して、ゐる此の小冊子によつて、自然物「おもちや」の趣味を知られた讀者は、併せて同書を見られんことを切にお勸めする。